

8 天草式製塩土器の形態変遷試論

— 碗部を中心に —

藤本 貴仁

はじめに

宇土半島や天草諸島の沿岸部は、古墳時代に土器製塩が行われたことで知られている。当該期に本地域で使用された製塩用の土器は「天草式製塩土器」と呼ばれており、大きく内湾する碗形の器の下部に細長い脚部がついており、ワイングラスのような形状を呈する（図1）。昭和30年代に天草市五和町沖ノ原遺跡の発掘調査でその存在が明らかになったもので、九州地方で初めて確認された古墳時代の製塩土器でもある（近藤1974、隈編1984）。

現在、天草式製塩土器が出土及び採集された遺跡は、宇土半島や天草諸島の上島及び下島北部沿岸、熊本平野などで、参考遺跡も含めて27遺跡で確認されている（図2）。主に宇土半島から天草諸島にかけての有明海沿岸部を中心に分布しており、天草諸島対岸の長崎市野母崎町脇岬遺跡でも脚部片が出土している（町田・村川1993）。一方、八代海（不知火海）沿岸では参考遺跡を含め4遺跡が知られている。熊本平野などの消費地出土の天草式製塩土器を除けば、当該地域以外での出土例は知られておらず、今のところ宇土半島から天草諸島にかけての比較的限られた地域で土器製塩が行われていたとみられる⁽¹⁾。

過去、熊本県では天草市五和町沖ノ原遺跡や宇城市三角町大田尾遺跡、天草郡苓北町出来町遺跡などの製塩遺跡の発掘調査が実施されているが、1978年に実施された出来町遺跡の調査（松本編1979）を最後に製塩遺跡の発掘調査は行われていないため、当該地域における土器製塩の実態については未だ不明な点が多い。だが近年、熊本市二本木遺跡群（金田・岩谷編2007）、鹿本郡植木町石川遺跡（中原編2002）、菊池市泗水町篠原遺跡（吉田1998）などの熊本平野から県北部にかけての集落遺跡より天草式製塩土器が出土しており、消費地遺跡へ天草式製塩土器が搬入されたことが判明するなど、流通の実態が徐々に明らかになってきている。

興味深いことに、消費地遺跡から出土した資料は例外なく天草式製塩土器の碗部であることから、脚部を折り取られた碗部のみが祭祀など何らかの目的で集落に持ち込まれたであろうことがわかってきた。これらの遺跡から出土した天草式製塩土器については、胎土の違いに示されるように、複数の生産地から消費地へ運ばれたことが想定される（藤本2007：pp. 321-323）。

しかし、これまでの研究では、碗部に関する型式学的検討はほとんど行われておらず、年代的位置づけが明確ではないという課題があった。本稿では近年蓄積されつつある天草式製塩土器の碗部に主眼をおいて、分類や編年などについて検討したい。

1 分類及び編年に関する研究について

天草式製塩土器の型式学的な検討についてはいくつかの論考があるが、そのほとんどは脚部に関するものである。

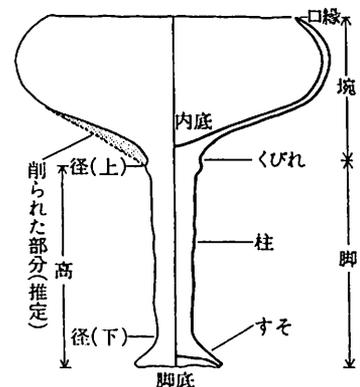


図1 天草式製塩土器模式図

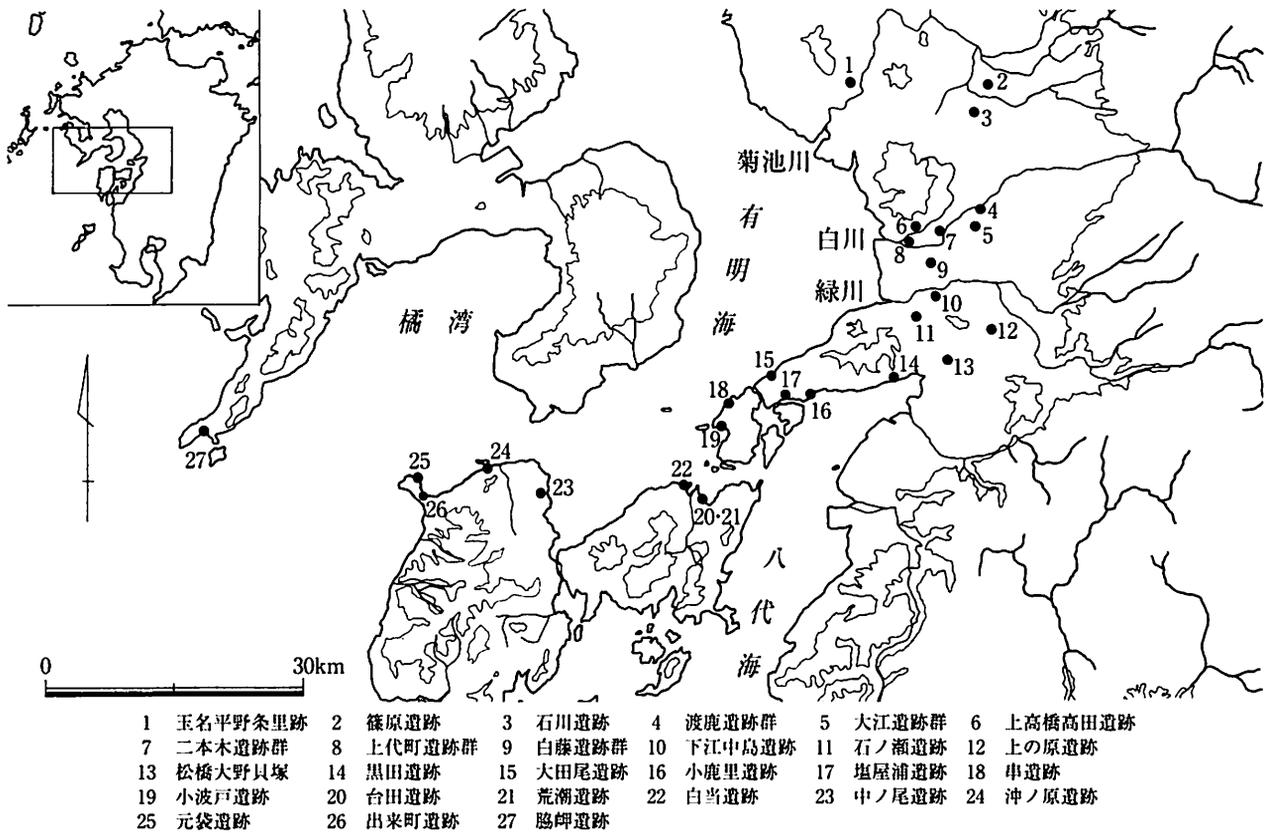


図2 天草式製塩土器関連遺跡（群）

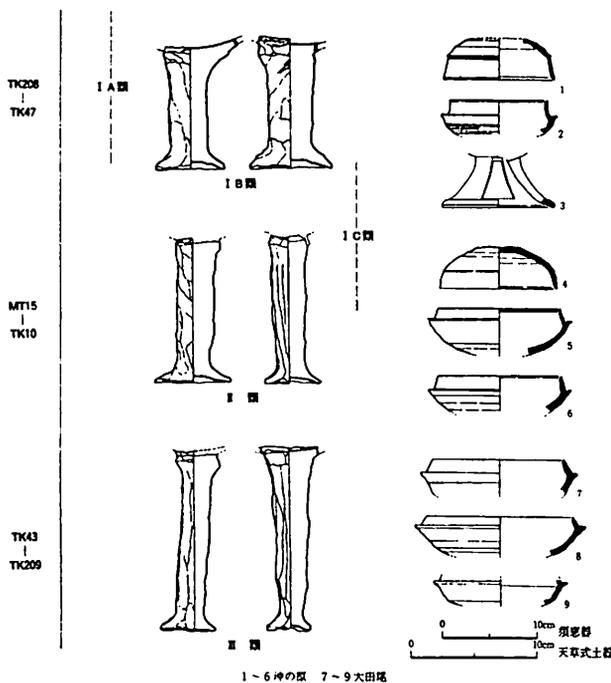


図3 天草式製塩土器の脚部の編年

天草式製塩土器の研究に先鞭をつけた近藤義郎氏は、脚部をⅠ群からⅢ群に分類し、共伴須恵器との対応関係から、太く短いⅠ群からこれより細く長いⅡ・Ⅲ群へと変遷することを提示し、沖の原遺跡で出土したⅡ群と大田尾遺跡出土のⅢ群については、時期差ではなく地域差とした（近藤1974：pp. 22-31）。その後、近藤氏は『日本土器製塩研究』（近藤編1994）の付図「日本製塩土器地域別編年図表」において、Ⅱ群をⅢ群より古く位置付けた。細かな時期比定はされていないが、当該図表から読み取る限り、Ⅲ群は7世紀代としている。

近藤氏以外では、松根恭子氏の論考（松根2004）や拙稿（藤本2004）があるが、基本的には近藤氏が提示した脚部が太く短いものから細く長いものへという変化の方向性については同様の考えであり、大きな変更点はない（松根2004：pp.

63-66, 藤本2004：pp. 36-37）。

拙稿では脚部の分類以外に、出土須恵器から年代的位置づけを再検討した。沖ノ原遺跡2次調査よりⅠB類（近藤分類のⅠ群に相当）はⅡ類（同じくⅡ群に相当）に先行すると考えられ、Ⅱ類はMT

15～TK10型式期、Ⅱ類に先行するⅠB類はTK208～TK47型式期、Ⅲ類（同じくⅢ群に相当）はTK43型式期には出現し、TK209型式期までは継続すると指摘した（藤本2004：pp. 37-40, 図3）。

その他、山崎純男氏は福岡県内の古墳時代製塩土器の形態変遷に言及するなかで、福岡市海の中道遺跡出土製塩土器に後出する6世紀中頃から後半のものとして、沖ノ原遺跡や大田尾遺跡出土の天草式製塩土器の全体復元図案を提示している（山崎1994：pp. 302-303, 図4）。

一方、碗部の特徴から年代的位置づけについて言及した論考としては、林田和人氏による検討があるのみである（林田2007）。林田氏は二本木遺跡群13次調査出土の天草式製塩土器と篠原遺跡や熊本市白藤遺跡群などから出土した天草式製塩土器の碗部形態を比較し、時期差を示す指標として口縁端部の形態を指摘している（林田2007：p. 434）。

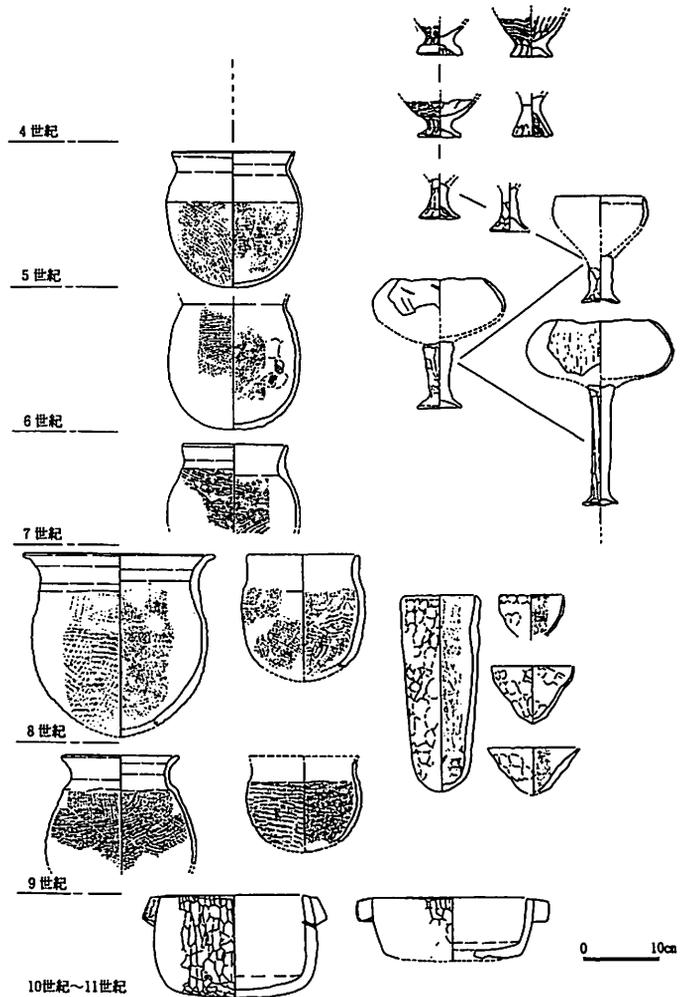


図4 福岡県の製塩土器の編年

2 分類

(1) 天草式製塩土器の製作技法と特徴について

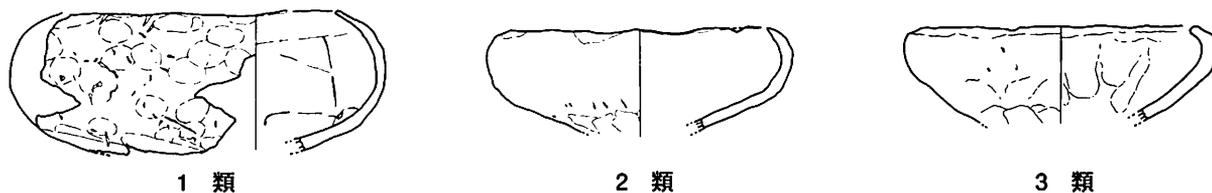
天草式製塩土器の形態や製作技法の特徴についてみると、碗部は粘土紐ないし粘土帯巻き上げ手法で成形しているとみられ、口縁部は大きく内湾しており、内面は手持ちヘラ削りやナデで丁寧かつ平滑に仕上げられている。これとは対照的に、外面は指オサエやケズリ痕が明瞭に残り、脚部と碗部の接合部もケズリ痕がはっきりと残るなど粗雑な印象を受ける。

一方、脚部は手の平で粘土塊を握って棒状に成形した後、指先の押圧で裾部を整形し、器面の凹凸を指ナデによって平滑に仕上げる。時期が新しくなるにしたがい、上下方向のナデを意図して施した「面取り状ナデ」（藤本2004：pp. 36-37）が多用されるなどの特徴がある。

(2) 碗部の分類

碗部は口縁端部の形態、口縁部から底部にいたるプロポーションなどの特徴から、以下に示すように3つに分類できる（図5）。なお、口縁端部は碗中央部から口縁端部にかけて緩やかに内湾するa類と、口縁端部を内側に折り曲げるb類がある（図6）。

1類：底部から口縁部にかけては、円弧状に緩やかにカーブを描き、全体的に丸みを帯びており、口縁部が大きく内湾する。碗中央部が最大径で、碗部高にくらべて碗部径がかなり大きいことから、全体的なプロポーションは、ひしゃげた球形状を呈する。口縁端部はa類である。



1類：石川遺跡 2類：白藤遺跡群 3類：二本木遺跡群

図5 天草式製塩土器の碗部の分類



図6 口縁部形態の分類

典型的な天草式製塩土器の碗部として知られている（図1）。

2類：底部から中央部にかけては、やや斜め上方に直線的に開いており、上半部は緩やかに内湾する。口縁端部は、a類のものもあるが、多くはb類である。碗部最大径は中央より上部に位置する。

3類：底部から中央部にかけては1・2類よりも斜め上方（45°前後）に向かって直線的に開き、口縁部に近い碗上部を内側に折り曲げることで内湾させる。碗部全体のプロポーションは、口縁部が内湾した鉢形土器状を呈する。口縁端部はb類である。

1類は沖ノ原遺跡や大田尾遺跡（近藤1974）、篠原遺跡（吉田1998）、石川遺跡（中原編2002）、熊本市渡鹿遺跡群（藤本2004）、2類は白藤遺跡群（藤本2004）、熊本市上高橋高田遺跡（藤本2004）、熊本市上代町遺跡群、3類は二本木遺跡群（金田・岩谷編2007）、熊本市大江遺跡群（藤本2004）で出土している⁽²⁾。碗部が出土した遺跡が多い熊本平野では、2・3類が多数を占めることが指摘できる。

3 編年と法量の変化

(1) 編年

以下では、遺構などから出土した天草式製塩土器と共伴遺物から、分類した1～3類の年代的位置付けを検討する（図7）。

篠原遺跡S I 311住居址 長辺5.61m、短辺5.52mの正方形プランの竪穴住居址である。土師器の甕や模倣坏、須恵器の蓋坏や坏身を中心とする数多くの遺物とともに、天草式製塩土器が約180点、計20個体相当が出土している（中原2007：pp. 169-171）。出土した天草式製塩土器の碗部の口縁端部はa類であり、b類のものは確認できないことや、残存状態が良好なものから判断してほぼ全て1類とみられる。出土須恵器よりTK10型式期（6世紀中頃）の住居址であろう。

本遺跡では6世紀中頃から後半にあたるTK10～TK43型式期の竪穴住居跡がS I 311を含めて11軒確認されており、このうち10軒から総数350点ほどの天草式製塩土器の碗部片が出土している（吉田1998）。比較的多くの天草式製塩土器が出土したS I 304住居址やS I 308住居址などでもS I 311住居址と同様に2・3類とみられる破片は確認できず、全て1類と判断される。

石川遺跡13区16号住居址 長辺5.34m、現状短辺2.74mの竪穴住居址である。本遺跡において天草式製塩土器の出土数が最も多い遺構であり、残存状態が良好な資料は全て1類である。共伴遺物については、土師器坏は須恵器模倣坏が多く、須恵器の坏蓋や坏身、提瓶などが出土しており、本遺構はTK10型式期に位置付けられる。

なお、本遺跡では、6世紀初頭のTK47型式から7世紀初頭のTK209型式までの時期に属する計

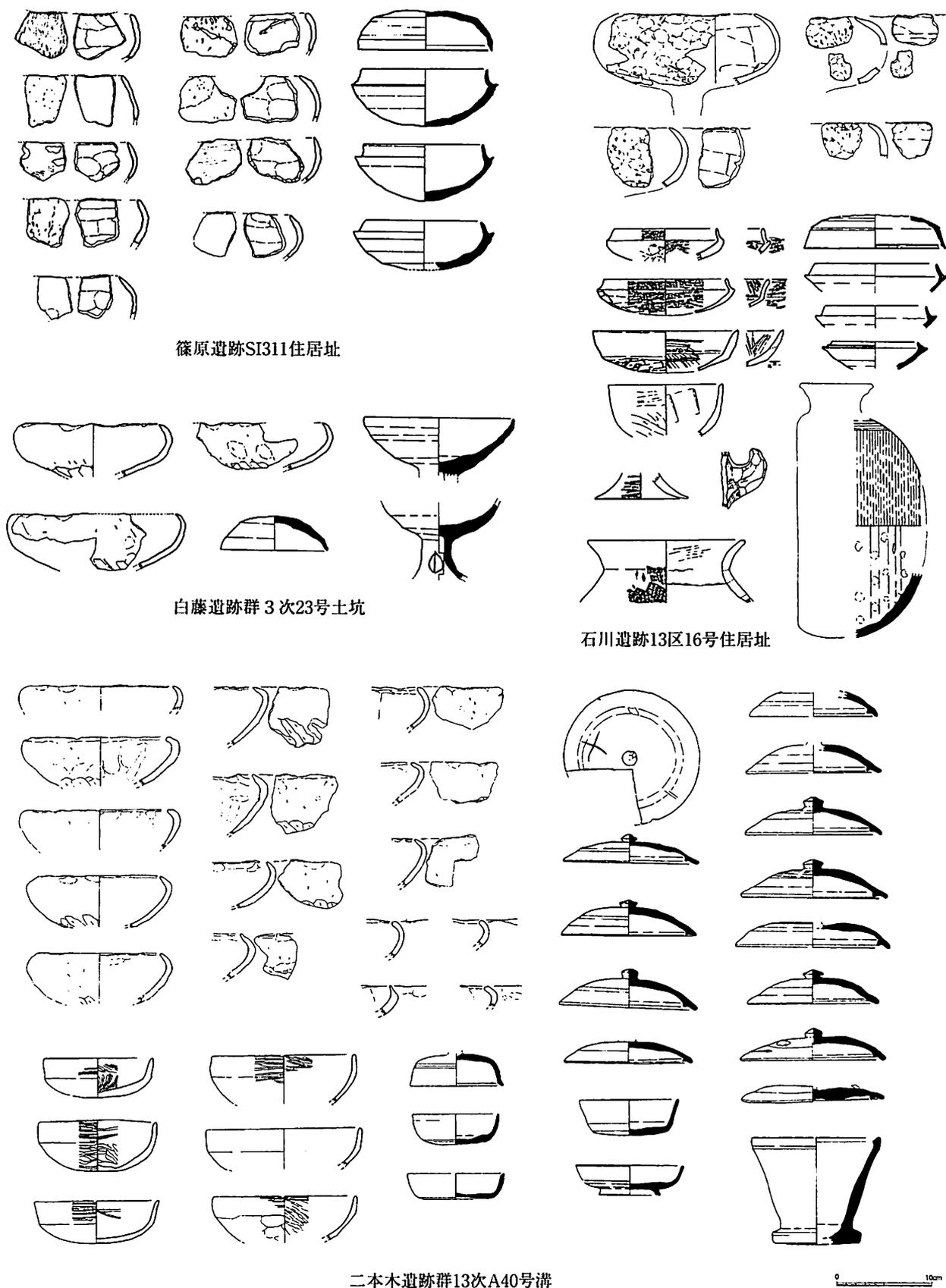


図7 遺構出土の天草式製塩土器及び共伴遺物

11軒の竪穴住居址から破片数約40点、計23個体相当の天草式製塩土器が確認されている（中原2002：pp. 255-257）。分類が可能な資料は全て1類に相当する。

白藤遺跡群 3次23号土坑 本遺構からは天草式製塩土器の碗部が少なくとも3個体出土しており、比較的残存状況も良好で口径復元することができる資料もある。口縁端部は後述する二本木遺跡群出土資料ほどは強く屈曲しないが、口縁部を内側に曲げることで内湾させる特徴はb類に通じるものであり、これらはいずれも2類と判断できる。共伴した須恵器は6世紀末頃から7世紀前半頃のTK209型式～TK217型式期に相当する。

二本木遺跡群13次A40号溝 本遺構から出土した遺物の大半は、上位の粘質土中からの出土であり、6世紀末から7世紀代の須恵器や土師器が数多く出土しているが、出土遺物の主体となる時期は7世紀中頃から後半頃のTK46型式期と判断される。本遺構から出土した資料の口縁端部は、強く内側に折り曲げるb類であり、残存状態が良好な資料は3類に限られる。

その他、沖ノ原遺跡出土と報告されている資料の口縁端部はa類であり、全体的な形態から判断してほぼ全て1類の碗部とみられる（近藤1974：pp. 10-25）。本遺跡については、出土須恵器から5世紀後半から6世紀初頭のTK208～TK47型式期に操業を開始し、MT15～TK10型式期に盛期を向かえ、その後は衰退すると考えられる（藤本2004：pp. 42-43）。

また、大田尾遺跡の調査では、土器層を呈する第Ⅲ層でTK43～TK209型式の須恵器の坏身が出土しており、周辺からTK10型式の須恵器が表採されている。このことから、TK10型式期ないし遅くともTK43型式期には操業を開始したと考えられ、少なくともTK209型式期までは継続するとみられる（藤本2004：pp. 42-43）。報告されている碗部の資料は全て1類である（近藤1974：pp. 17-25）。

最近発掘調査された玉名市玉名平野条里跡SK010では、胎土から判断して3個体分以上の天草式

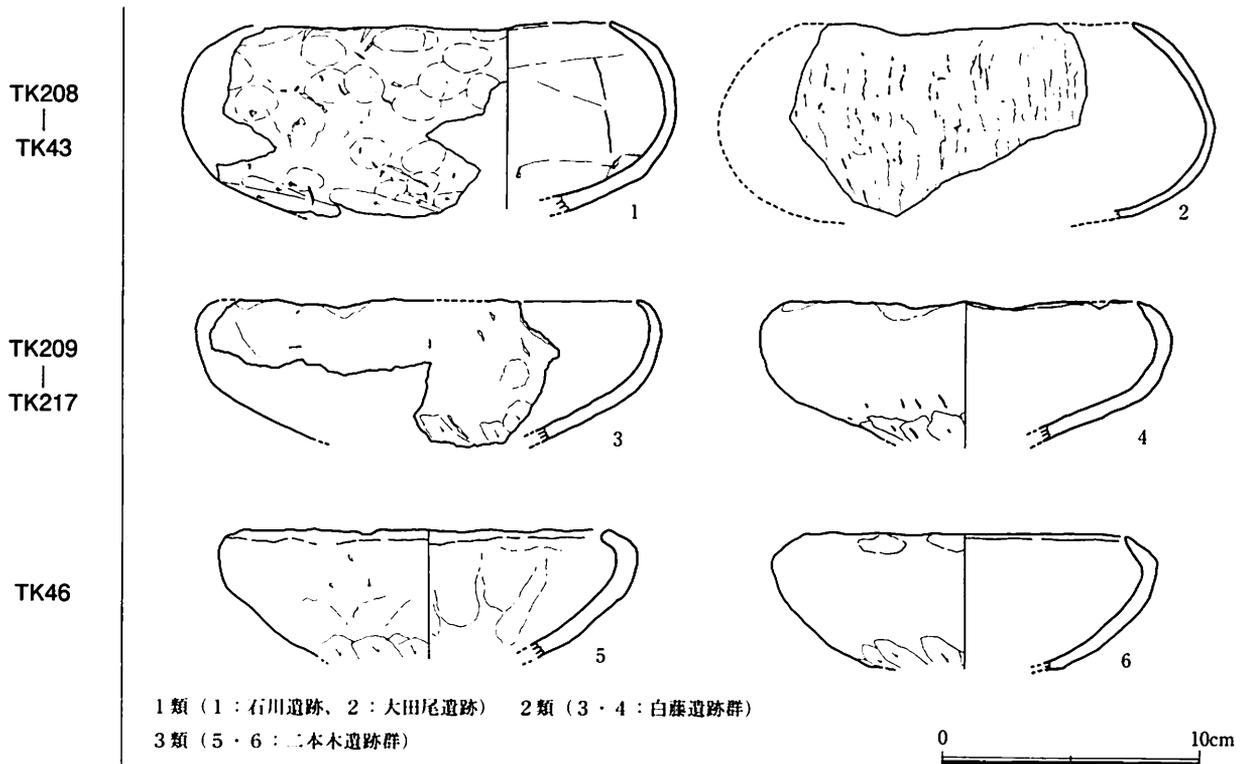


図8 天草式製塩土器の碗部の編年

製塩土器が馬骨や須恵器とともに出土している。出土した碗部は全て1類であり、出土須恵器はTK10型式に相当する。また、熊本市富合町下江中島遺跡では、古墳時代後期の土師器や須恵器とともに2個体以上の碗部が出土しているが、これらも1類である⁽³⁾。

以上の検討結果を総合的に判断すれば、1類は6世紀後半以前のTK43型式期以前と想定され、天草式製塩土器が出現する5世紀後半のTK208型式期までさかのぼるとみられる。また、2類は6世紀末から7世紀前半頃のTK209～TK217型式期、3類は7世紀中頃から後半頃のTK46型式

期に相当すると考えられる(図8)。林田氏が指摘するように、口縁端部の特徴は時期差を示す指標と考えられ(林田2007:p.434)、口縁端部は碗中央部から口縁端部にかけて緩やかに内湾するa類から、口縁端部を内側に強く折り曲げるb類へと変遷するとみられる。

(2) 法量の変化

次に、口径復元が可能な資料をもとに碗部の法量の変化を検討したい。法量の変化を検証するうえで有効とみられるのが碗部最大径と器高の比較であるが、碗部最大径と器高の両方が判明する資料がほとんどないことから、本稿では碗部最大径のみを比較した(表1)。検討に用いた資料は、1類が沖ノ原遺跡・大田尾遺跡・石川遺跡出土資料、2類が白藤遺跡群・上代町遺跡群出土資料、3類が二本木遺跡群出土資料である。

その結果、1類で最も大きいものは19.4cm、小さいものは17.3cm、平均18.5cmである。同様に、2類では最も大きいもので18.1cm、小さいもので16.1cm、平均約16.9cm、3類では最も大きいもので16.6cm、小さいもので14.9cm、平均15.7cmである。

検討した資料数が少なく、しかも分析資料の多くが復元値であるため、今後の資料の増加を待って再検討する必要があるが、この結果より時代が下るにしたがって碗部が徐々に小型化する傾向を読み取ることができよう。形態の変化とともに、法量も縮小化の傾向を読み取ることができる⁽⁴⁾。

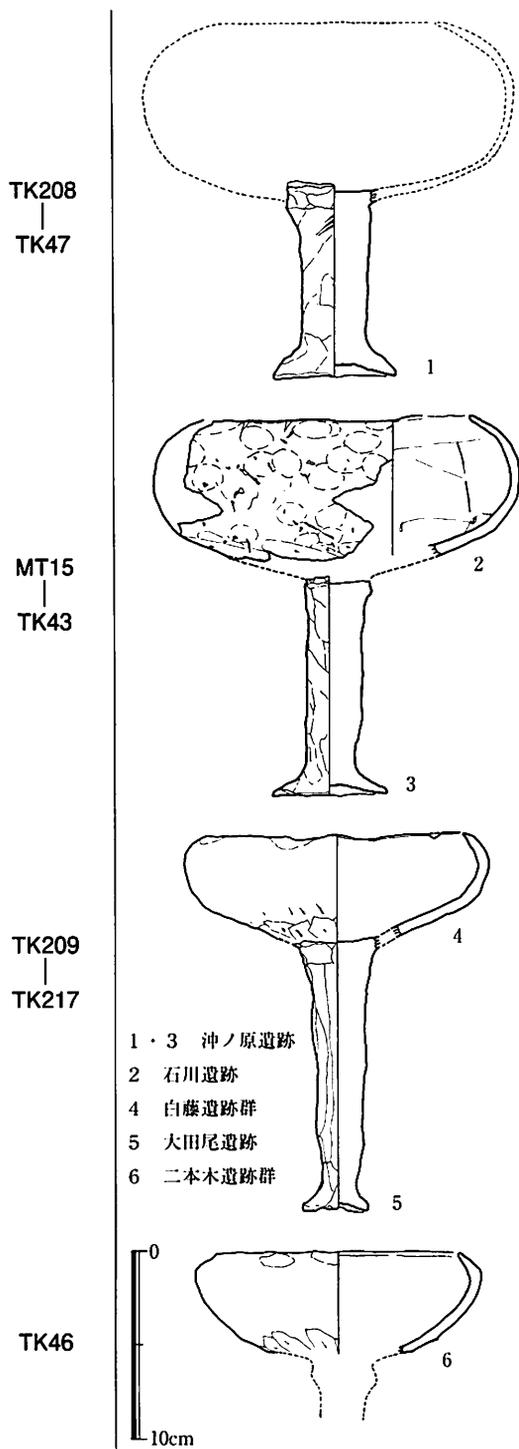
4 まとめ－天草式製塩土器の形態変遷について－

これまでの製塩遺跡や消費地遺跡の発掘調査では、碗部から脚部までが残存し、1個体で全体的な形が判明する資料は皆無であった。また、復元案については、近藤氏や山崎氏が提示した想定復元図(図1)や編年図(図4)などがあるが(近藤1974:p.18, 山崎1994:p.303)、これまでの研究では、共伴遺物との関係から碗部と脚部の時期を検討したうえで作成された編年図は提示されていないことから、これらの時期ごとにおける対応関係を明らかにしたうえで編年図を示すことにしたい。

まず、脚部に関しては、先述のとおり初現期のIB類はTK208～TK47型式期、続くII類はMT15～TK10型式期、長脚化が著しいIII類はTK43型式期～TK209型式期に位置付けられる(藤本2004:pp.37-40, 図3)。これに対し、碗部は先の検討結果より1～3類に分類され、1類はTK208～TK43型式期、2類はTK209～TK217型式期、3類はTK46型式期に相当すると考えられる。

表1 天草式製塩土器の碗部最大径

分類	遺跡(群)	遺構・出土位置	最大径(cm)	備考
1類	沖ノ原	B1区第Ⅲ層	17.5	
	〃	〃	19.3	
	大田尾	表面採集	19.4	
	石川	10区7号住	17.3	
	〃	13区16号住	19.1	
			平均18.5	
2類	白藤	23号土坑	16.1	3次調査
	〃	〃	18.1	〃
	上代町	包含層	16.2	1次調査
	〃	〃	17.2	〃
			平均16.9	
3類	二本木	A40号溝	16.3	13次調査
	〃	〃	16.6	〃
			14.9	〃
			14.9	〃
			平均15.7	



- 1・3 沖ノ原遺跡
- 2 石川遺跡
- 4 白藤遺跡群
- 5 大田尾遺跡
- 6 二本木遺跡群

図9 天草式製塩土器の編年

つまり、脚部と碗部の対応関係は、脚部ⅠB類やⅡ類は碗部1類、脚部Ⅲ類は碗部1類及び2類に相当する。碗部3類の脚部に関しては、TK217型式期以降の脚部が知られていないため不明であるが、脚部は一貫して長脚化の方向で変遷しており、碗部3類に対応する脚部はⅢ類より長脚化する可能性がある（図9）。

ここで問題となるのが、脚部Ⅲ類（TK43～TK209型式期）と碗部1類（TK208～TK43型式期）及び碗部2類（TK209～TK217型式期）の対応関係である。篠原遺跡のTK10～TK43型式期の竪穴住居址に伴う資料は碗部1類であることや、TK209～TK217型式期の須恵器が出土した白藤遺跡群3次23号土坑では、碗部2類が出土していることを重視し、図9の復元図では脚部Ⅲ類と碗部2類を対応させている。また、これまでの調査では、脚部Ⅰ類に対応する時期の碗部の全体的な形が判明する資料が出土していないため破線で示している。

いずれにしても、両者の対応関係については、資料の増加を待って再検討する必要がある、今後の調査に期する部分が大きいいえよう。

なお、碗部最大径の比較により、碗部が小型化する傾向を指摘したが、それとともに長脚化が進んでいることは注目される。碗部が比較的大きい段階では太く短い安定した脚部であったものが、碗部の小型化に伴い長脚化したとの想定も可能であり、両者は密接に関連しているとみられる。

おわりに

以上、天草式製塩土器の碗部を中心とした形態変遷について自分なりの考えをまとめた。資料不足の感が否めないなかで、今回あえて小稿をまとめたのは、近年、熊本平野周辺の集落遺跡の調査などで碗部の資料

が増加し、消費地へ運搬されていることが明らかになったにもかかわらず、碗部の年代がはっきりしなかった点にある。また、消費地から出土する碗部を研究することは、流通の問題だけでなく、現状ではよくわかっていない生産地の実態を把握するうえで不可欠と考えたからである。

以前、流通の問題については、胎土の違いに示されるように、複数の生産地から消費地へ運ばれており、天草諸島（下島）産と宇土半島産に大きく分けられることを指摘した（藤本2007：pp. 321～323）。今回の分析結果より、時期ごとにおける生産地や流通の動向について言及する下地ができたといえるが、まだ検討すべき課題も数多く残されている。

流通以外にも、製塩遺跡と古墳及び集落の分析、古代の土器製塩との関係などについても、熊本県域及び九州における古墳時代土器製塩の実像を明らかにするうえで重要な課題といえる。

小稿をまとめるにあたり、以下の皆様に資料調査に関するご協力や有益なご助言を賜った。文末ながら記して感謝いたします。

網田龍生、金田一精、杉井健、高木恭二、中原幹彦、長谷部善一、林田和人、正岡祐子（敬称略）

注

- 1) 水俣市公民館展示室資料のなかに出土地不明とのキャプションが付されている天草式製塩土器が展示されているが、同資料室の別保管されているコンテナに「天草郡二江町出土」（現・天草市五和町二江）と書かれた紙が残されている。当該地は沖ノ原遺跡の所在地であり、本製塩土器の胎土も沖ノ原出土の天草式製塩土器と酷似していることから、おそらく本遺跡からの採集品であろう。
- 2) 渡鹿遺跡群、白藤遺跡群、上高橋高田遺跡、大江遺跡群の資料については、概要報告書には実測図や写真は掲載されていないが（網田1992・1999 a・1999 b, 林田2000, 原田2004）、筆者実測図を藤本2004で発表させていただいた。また、上代町遺跡群（網田2007）の資料については未発表であるが、熊本市教育委員会網田龍生氏のご厚意により実見させていただいた。
- 3) 玉名平野条里跡及び下江中島遺跡出土資料は現在整理作業中であるが、熊本県教育委員長長谷部善一氏のご厚意により実見させていただいた。
- 4) 天草式製塩土器の法量について、林田和人氏は資料が少ないため不明な点が多いとしたうえで、小型化するものと推測している（林田2007：p. 434）。

引用・参考文献

- 網田龍生 1992「上高橋高田遺跡」第1次調査区発掘調査概報Ⅰ 熊本市教育委員会
- 網田龍生 1999 a「白藤遺跡群第3次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第2号 熊本市教育委員会
- 網田龍生 1999 b「上高橋高田遺跡第2次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第2号 熊本市教育委員会
- 網田龍生 2007「上代町遺跡群第1次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第8号 熊本市教育委員会
- 金田一精・岩谷史記編 2007「二本木遺跡群」Ⅱ 二本木遺跡群第13次調査区発掘調査報告書 熊本市教育委員会
- 隈 昭志編 1984「沖ノ原遺跡」五和町教育委員会
- 近藤義郎 1974「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集 日本塩業研究会：pp. 9-33
- 近藤義郎編 1994「日本土器製塩研究」青木書店
- 中原幹彦 2002「天草式製塩土器」『石川遺跡』植木町文化財調査報告書第14集 植木町教育委員会：pp. 254-261
- 中原幹彦 2007「石棺輸送と製塩土器祭祀に関する試論」『大王の棺を運ぶ実験航海-研究編-』石棺文化研究会：pp. 168-179
- 中原幹彦編 2002「石川遺跡」植木町文化財調査報告書第14集 植木町教育委員会
- 林田和人 2000「渡鹿遺跡群第4次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第3号 熊本市教育委員会
- 林田和人 2007「製塩土器の評価」『二本木遺跡群』Ⅱ 熊本市教育委員会：p. 434
- 原田範昭 2004「大江遺跡群第79次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』第6号 熊本市教育委員会
- 藤本貴仁 2004「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 33-49
- 藤本貴仁 2007「熊本県域における古墳時代の土器製塩について」『古墳時代の海人集団を再検討する-「海の生産用具」から20年-』第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 埋蔵文化財研究会：pp. 317-324
- 町田利幸・村川逸朗 1993「脇岬遺跡」長崎県文化財調査報告書第109集 長崎県教育委員会
- 松根恭子 2004「九州の土器製塩研究」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会：pp. 51-73
- 松本健郎編 1979「生産遺跡基本調査報告書」Ⅰ 熊本県文化財調査報告第38集 熊本県教育委員会

山崎純男 1994「福岡県」『日本土器製塩研究』青木書店：pp. 274-306

吉田正一 1998『篠原遺跡』泗水町文化財調査報告第3集 泗水町教育委員会

挿図・表出典

図1：近藤1974より転載。

図3：藤本2004より転載。

図4：山崎1994より転載。

図5：1類と3類は中原編2002と金田・岩谷編2007掲載図を再トレース。2類は藤本2004の筆者実測図を使用。

図7・8：以下の報告書・論文より転載及び再トレース。須恵器実測図の一部については、断面を黒く塗りつぶすなどした。

篠原遺跡：吉田1998、白藤遺跡群：藤本2004、石川遺跡：中原編2002、二本木遺跡群：金田・岩谷編2007、大田尾遺跡：近藤1974

図9：碗部は以下の報告書掲載図、脚部は藤本2004掲載図を再トレースした。

石川遺跡：中原編2002、白藤遺跡群：藤本2004、二本木遺跡群：金田・岩谷編2007

表1：分析に用いた資料の出典は、沖ノ原遺跡・大田尾遺跡：近藤1974、石川遺跡：中原編2002、白藤遺跡群：藤本2004、二本木遺跡群：金田・岩谷編2007。未発表資料の上代町遺跡群資料については、筆者実測図を使用。